

# 平成 27 年度 私立学校専門研修会 グローバル教育研究部会 実施報告書

## 研究のねらい 私学のダイバーシティをいかに発揮するか

当部会は、諸外国の教育制度等を研究し、わが国の教育制度等との比較などから、「海外在住生徒教育」、「帰国生徒教育」、「外国人生徒教育」、「国際理解教育」等をいかに有機的に連携させるか、また、これらの私立学校の先導的な実践の積み重ねが、公教育全体の発展にどう寄与してきたかについて研究し、更に、国際社会において、グローバルな視野に立って主体的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを生徒に習得させるための教育について研究することを目的としています。

今回は、「私学のダイバーシティをいかに発揮するか」を研究のねらいとして、各々の学校が建学の精神を基に、グローバル化が加速する変革の時代の中で、どのように自らの特色を活かして多様性に富んだ教育プログラムを打ち出し、未来を拓く人材を育てていくのか、考察していきます。

研修内容としては、世界を舞台に活躍中のお二人による講演を用意していしました。はじめに、世界各地で多くの病院計画・研究に携わる工学院大学名誉教授の長澤泰氏、続いて、世界中で学校の運営や企業の支援を行い、わが国と世界が抱える問題を教育の力で解決していくプロジェクトのプランナーである特定非営利活動法人 very50 代表理事の菅谷亮介氏に、グローバルかつ多様な観点から語って頂きました。

午後からは、会場を工学院大学附属中学高等学校に移し、21世紀型スキルの実現に向けて、思考力を育む双方向型授業など最先端の教育プログラムへの取り組みを視察致しました。

- 会 期 平成 27 年 9 月 10 日(木)
- 会 場 工学院大学・新宿キャンパス 6 階「652」 東京都新宿区西新宿 1-24-2  
工学院大学附属中学高等学校 東京都八王子市中野町 2647-2
- 参加人員 46 名(定員 50 名)
- 参加対象 理事長, 校長, 副校長・教頭, 国際理解教育担当及び一般の教員
- 基本日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
	30	45	45	45	30	15			45		
9月 10日 (木)	受 付	開 会 式	講 演 Ⅰ	講 演 Ⅱ	昼 食	移 動	学 校 視 察			閉 会 式	移 動

### 研修プログラム

#### 講 演 Ⅰ

演 題 「それぞれの学校が私学のダイバーシティをいかに発揮するか」

講 師 長 澤 泰 工学院大学 前副学長・前建築学部長／学校法人工学院大学 理事・名誉教授

#### 講 演 Ⅱ

演 題 「“世界を変える人材”教育の条件」

講 師 菅 谷 亮 介 特定非営利活動法人 very50 代表理事

#### 学校視察 「工学院大学附属中学高等学校」

- ①挨拶 工学院大学附属中学高等学校 校長 平方 邦 行
- ②学校説明
- ③施設見学
- ④授業視察(希望の授業を1クラス(50分間)視察)
- ⑤学校関係者との協議(視察した授業を担当した先生方との意見交換)

講師・指導員(順不同)

長 澤 泰 (工学院大学 前副学長・前建築学部長／学校法人工学院大学 理事・名誉教授)  
 菅 谷 亮 介 (特定非営利活動法人 very50 代表理事)  
 中 川 武 夫 (一般財団法人日本私学教育研究所 所長)

専門委員・客員研究員・指導員 (順不同)

大 羽 克 弘 (千葉英和高等学校 理事長・校長)  
 平 方 邦 行 (工学院大学附属中学高等学校 校長)  
 須 藤 勉 (東京学園高等学校 副校長)  
 山 中 幸 平 (学校法人山中学園 理事長)  
 山 崎 吉 朗 (一般財団法人日本私学教育研究所 主任研究員)

日程・プログラム

◇9月10日(木)

会場 : 会場:工学院大学・新宿キャンパス6階「652」  
 工学院大学附属中学高等学校 ホール

09:00～09:30	受 付
09:30～09:45	開 会 式 ◆挨拶 中川武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長 ◆専門委員・客員研究員紹介 ◆日程説明
09:45～10:45	講 演 I ◆演 題 「それぞれの学校が私学のダイバーシティをいかに発揮するか」 ◆講 師 長澤 泰 工学院大学 前副学長・前建築学部長／学校法人工学院大学 理事・名誉教授
10:45～11:45	講 演 II ◆演 題 「“世界を変える人材”教育の条件」 ◆講 師 菅谷亮介 特定非営利活動法人very50 代表理事
11:45～12:30	昼 食
12:30～13:15	移 動
13:15～16:45	学校視察 ①挨拶 工学院大学附属中学高等学校 校長 平方邦行 ②授業に関する説明 ③授業視察(5時間目) 希望授業を1クラス(50分間)視察。 中学1年A組「幾何」／中学1年B組「地理」 中学1年C組「English」／中学3年C組「数学I」 高校1年6組「現代社会」／高校2年7組「現代文」／高校3年5組「化学」 ④授業視察(放課後の中学1年生の取り組み) 中学1年の学び(ホームステイに向けての準備、iPadを使つての活動、プレゼンテーション) 中学1年ハイブリッドインターナショナルクラス 中学1年ハイブリッド特進クラス 中学1年ハイブリッド特進理数クラス ⑤施設見学 ⑥学校関係者との協議 授業担当者との質疑応答・意見交換会 助言・指導 グローバル教育研究専門委員・客員研究員
16:45～17:00	閉 会 式 ◆専門委員長総括 大羽克弘 グローバル教育研究部会専門委員長

## ◆ 概要 ◆

平成 27 年 9 月 10 日（木）、工学院大学・新宿キャンパス〔東京都新宿区〕および工学院大学附属中学高等学校〔東京都八王子市〕にて、「平成 27 年度私立学校専門研修会・グローバル教育研究部会」が開催された。

当部会は、諸外国の教育制度を研究し、わが国の教育制度との比較などから、「海外在住生徒教育」「帰国生徒教育」「外国人生徒教育」「国際理解教育」等をいかに有機的に連携させるか、また、これらの私立学校の先導的な実践の積み重ねが、公教育全体の発展にどう寄与してきたかについて研究し、更に、国際社会において、グローバルな視野に立って主体的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを生徒に習得させるための教育について研究することを目的としている。

今年度は、「私学のダイバーシティをいかに発揮するか」を研究のねらいとして、46 名の先生方に参加いただいた。

午前中は、まず開会式にて、中川武夫所長より、現在、日本のおかれているグローバル教育の現状などについての話を含めた挨拶が行われた。引き続き、世界を舞台に活躍中のお二人による講演が行われた。はじめに、世界各地で多くの病院計画・研究に携わる工学院大学名誉教授の長澤泰氏、続いて、世界中で学校の運営や企業の支援を行い、わが国と世界が抱える問題を教育の力で解決していくプロジェクトのプランナーである特定非営利活動法人 very50 代表理事の菅谷亮介氏に、グローバルかつ多様な観点から講演をいただいた。

午後からは、会場を工学院大学附属中学高等学校に移し、21 世紀型スキルの実現に向けて、思考力を育む双方向型授業など最先端の教育プログラムへの取り組みを視察した。



## ◆ 開会式 ◆

開会式では、中川武夫・当研究所所長の挨拶が行われた。

挨拶では、グローバル人材の育成は教育にはかかせない要素であるが、具体的には非常に難しく、まず、第一段階としては先進的な学校を視察することで、自校においてどのように実践していくか、第二段階としては激しい社会の変化の中で生徒の生き方を考えていくことで、私学には建学の精神があり、それとともに考えていくことであると話した。そして、今回のグローバル教育研究部会はその第一段階と位置づけていて、参加された先生方とともに学んでいきたいとして、挨拶とした。



## ◆ 講演 I ◆

### 「それぞれの学校が私学のダイバーシティをいかに発揮するか」

長 澤 泰（工学院大学 前副学長・前建築学部長／学校法人工学院大学理事・名誉教授）

#### 工学院大学について

工学院大学は 1887 年（明治 20 年）に東京大学初代総長の渡邊洪基先生らが中心となり、工手学校として設立された。当時の帝国大学（現東京大学）工学部の卒業生が毎年 6 人から 8 人であり、その学士を支える工手を養成するための夜間学校での職人再教育から始まった。技術者を養成し、社会に貢献することが建学の精神であり、その精神は今も生きている。2013 年に創立 125 周年を迎え、現在、工学部、建築学部、情報学部、先進工学部と二部の大学院の体制で、学生約 6,300 名である。

建築学部は、都市デザイン、街作り、ランドスケールだけでなく、従来は別分野であったインテリア、家具なども取り入れている。まちづくり学科、建築学科、建築デザイン学科の 3 学科があり、12 分野を教育している。基礎を同じにするため、3 つの学科の 1 年生は同じカリキュラムで教え、専門教育も 1 年半までは同じ教科にしている。先進工学部はグローバルエンジニアリング学部を発展的に解消した学部で、大学院教育までを考えており、また国際的な活躍をする人材を育てるために物理、化学を主体に教えている。学部とは別に科学教育センターがあり、小中高の生徒約 8,000 名が参加する「わくわくサイエンス祭」等を開催している。3.11 東日本大震災時に被災地の子ども達を夏休みに新宿に招き、科学教室も行った。東京医科大学、東京薬科大学と医薬工連携も行っている。また、学生プロジェクトでは講義・演習以外に創造性を育成し、人間として成長させている。その中の 1 つにソーラーカープロジェクトがあり、世界大会等に参戦している。

防災関係は TKK 連携と呼んで、東北福祉大学、神戸学院大学、工学院大学が、その地域が被災にあったときに残りの 2 校が支援するという遠隔的な連携を行っている。3.11 東日本大震災には、本学で首都圏の帰宅困難約 1,000 人を受け入れ、情報の提供を行った。新宿区と協定を結び、緊急時は工学院大学をオープンにすることになっている。附属中学高等学校でもチャリティコンサートで基金を集め、寄附する活動を行っている。



## ハイブリッド留学

2013年に始まったハイブリッド留学はグローバル戦略の1つとして行っている。初年は9月から1月までの4カ月半英国カンタベリーで建築学部の3年生21名がホームステイを行った。工学院大学の職員6名が現地に行き日本語での専門講義を行い、英語の教育は英国人が行う。1週間の講義と試験を行い、合格すれば単位を与える。これは帰国時に取得単位がないと留年になるからである。日本語教育、英語教育の両方を行う。これがハイブリッドである。第1回目の21名の意見を聞くと、「度胸がついた」、「海外での生活を体験して、日本がいかに便利で安全な生活を送っているかということが分かった」、「英国人だけではなく、アジア、イスラム国家から来ている人達と大変交流ができた」、「向こうでは、自分で考えて行動しないとダメだ」ということであった。

一般的な英語圏の留学は、まず語学がTOEFL何点以上必要などと言われている。そして、授業料が70万から100万円かかる。「費用がかかる」「外国語が苦手」といった理由で内向き思考になり誰も行かない。それを破るため、英語力を問わず、まず現地に行く。専門教育は日本から現地へ赴き日本語で行うため、単位は落とさない。費用に関しては、授業料は無料で、個人の負担はホームステイの費用と渡航費用である。特徴は、英国は4ヶ月、米国は10週間で、大学の授業を丸ごとで実施することである。留学の間に現地のネイティブが英語で講義をし、プレゼンテーションやスピーチを行って、かなり英語力が強化されて帰ってくる。

英国留学は建築学部が3年次に行く。米国へは工学部が実験等が留学先では困難なため1年次に、先進工学部や情報学部が2年次に行く。内容は学科や対象学部によって違う。今年からハイブリッド留学で11単位を与えている。行く場所は建築学部は英国の世界遺産の町カンタベリーを、先進工学部はIT等があるため製造の町シアトルを選んでいる。英国の提携校はConcorde International、米国はGreen River Community CollegeとSouth Seattle Community Collegeである。ホームステイのホストファミリーはこちらで選択、登録をしている。一家庭一国籍で日本人二人一緒に入れることはせず、現地では日本語を話さない。

ハイブリッド留学について、「わざわざ海外まで行って日本語で授業するのか」とか、「日本人同士でかたまってしまうのではないかな」などの意見があるが、工学院大学の場合は、英語はある程度の力があれば、建築であれば図面や写真、機械であれば数式などでコミュニケーションがかなりできる。明治頃の画家等も留学しているが、英語力が決して高かったとは思えない。彼らも「芸術」がsecond languageであったと言っている。これからもハイブリッド留学を進めていきたいと考えている。

## まとめ

九州大学の医学部長を務めた方が、「これだけ多くの大学ができると、基本的な目標は同じでも、具体化についていろいろな変化があってもよい」と話している。ダイバーシティ、個性化が必要ということである。

学生は外に出て、社会人と協同していろいろなことをやる必要がある。グローバル戦略室でも「困難を乗り越えて成長する。国内にいてもいろいろなことがあるのだから、一歩進んで外へ出て国際的な場数を踏むことによって、判断力などが学べるのではないかな。グローバルな人材とは英語力があるだけではなくて、色々な場面でも対応できて、柔軟な発想の人」と言っている。

1970年頃、2年間、奨学生で渡英した。私が研究室で「ああ、それ知っているよ」と言うと、「嘘だ」と言われた。これは、英語力の差と、日本の世界的な地位である。「日本にそんなことできるはずはない」見られていた。当時、日本が言われたことは「知識のブラックホール、世界から取り入れても何も出さない」。確かにその通りである。なぜ世界から学ぶことができたのに何も出さなかったのか。日本の識字率は高い。中国語もある程度読める。欧米語はすぐ日本語に訳され、英語の小説も日本語で読むことができる。そして、生産は日本国内の工場にまかなえる時代が続いた。「話す」はなかったが、「読み」「書き」「そろばん」でよかった。しかし、今後はそうはいかなくなっている。昔は西洋に追いつけ追い越せであったが、これはもうやめた方が良い。競争など必要ない。日本が今までできていたのは何だったのか、日本がまだできていないことは何なのかを考えていくべきと思っている。中国が強大になってきたが、「中国に負けるな」ではなく、中国ができなくて、日本ができることはないかと考えなければならない。

医学の父ヒポクラテスが「何でも金に換算して考えるのはよくない」と言っている。また、ハーバード大学教授マイケル・サンデルも「最近は何でも金に換算して考えるが、買えないもの、買うべきではないものがある」と言っている。今、人間の臓器は買うことができる。しかし、それでいいのか。先生方が生徒達に問い掛けていただき、「君たちはこれからそういう世界に行かなければいけない」と言っていく必要がある。

国際化はまず、個人個人がお互いに信頼して、初めてコミュニケーションが始まる。それから組織になり、国になる。しかし、実際は、国から先にやっている。国際化といっても、「国境はどこにあるのですか」ということである。「国境」は地図の上にあるが、実際に地表の上にはない。人の心の中にある。だから、個人個人の内面の国境をなくすというのが第一と考えている。

標準化・統一化に向かう方向と、個別化、分立化の方向の2つの方向があると思っている。例えば、日本の病院が病院の形だと思っている日本人にはアフリカにある病院の外観を見ても病院に見えない。しかし、ある地域では、日本のような病院では健康を取り戻せず、精神的にやられてしまうこともある。ISO（国際標準化機構）で様々なものがグローバルスタンダードとして標準化されているが、もしかすると、標準化すべきではないのかも知れない。

日本は安全な国で、海外に比べて、人が死なない。私はたまたま死ななかつたので今生きてるだけなのだと思っている。3.11東日本大震災のように突然災害が襲ってきて、人が亡くなってしまうことがある。大学の研究室では、「あなたが卒業するときに、あなたの描く人生と実際の人生は異なる。人間はいつ死ぬか分からないと思っていなければいけないよ」と言っている。人間の死亡率は100%である。絶対死ぬのである。幸福は到達点ではなく、その過程にある。道は遠いが、必ず到達すると思っ、その途中を楽しむことが大切である。最後は死の世界に到達するわけである。

◆ 講演Ⅱ ◆

「世界を変える人材」教育の条件

菅谷 亮介 (特定非営利活動法人 very50 代表理事)



Very50 設立の背景

高校在学中に音楽業界に入った。卒業後2年目に、広島で開催されたアジア平和音楽祭で世界中から来た多様な国の人たちが音楽を通じて一緒になっていくという経験に大変感動し、世界中の人たちと出会いたいと考え大学に進学した。大学の長期休暇になると海外で作曲のために民族の音や声をサンプリングしていた。やがて、カンボジアやパキスタンの貧困街などを見るうちに、音を録っているだけではいけないと考え始め、国際協力、国際貢献の分野に興味を持ち、傾倒していった。

大学卒業時に進路を決める中で、NGO (非政府組織) や NPO (特定非営利活動法人) では稼げないため、若手のなり手がいない状況が続いていると考えた。稼げる NGO を作れば優秀な人たちも入ってくると考え、ビジネスを学ぶため、企業に入った。20代で夢を叶えたいと思い2008年に退職し、カンボジア、アフガニスタン、アフリカの地域をまわって、世界の問題が2001年頃に比べほとんど変わっていないことに気づいた。無知・無関心・無関与の3つの連鎖を解かないと世界の問題は変わらないと感じ、Very50という教育の団体を立ち上げるに到った。

Very50 とは

基本的には「自立した優しい挑戦者を増やす」ということを掲げてやっている。図 (詳細は Very50HP <http://very50.com/index.php> 参照) のように、志が低く知識・スキルが低い人は必ず一定数いる。この方々は、社会で救い、守っていくしかない。一番の問題は、頭は良いが、志が低い人。この方々が中枢に入ると、mindset (ものの見方・考え方) を変えていかない限り、世界の様々な問題は変わっていかない。

多くの学生たちは DREAMER である。Very50 で学んでいった方々は600名くらいだが、夢はあるが、成し遂げていくための経験・知識が無いという方々が来ている。この DREAMER を「自立した優しい挑戦者」に変えるのが Very50 の取り組みと言える。



Very50 の活動

通常3ヶ月間を1チーム10人から12人の日本と韓国と中国、アメリカといった様々な国の人たちとの混合チームを作り、例えば、マーケティング、ロジカルシンキングのようなベーストレーニングを受けていただく。プレーヤーの方々の招いて実践的にトレーニングを積んでいる。その時にアジア新興国の起業家の経営課題を題材にする。例えば、インドネシアの GREENNA (グリーンナ) という会社で、どのように会社のブランドを立ち上げ、お客様とコミュニケーションを取り、きちんとした反応ができるかというプロセスである。そして、社長は何がしたいのかを突き詰めていく。ミッションやビジョンを考えていくといったことを授業でやっている。実際に現地に行き、起業家達と共に本当に解決しなければいけないミッションを共に解決しながら学んでいくこのプログラムを Mission on the ground (MoG) と呼んでいる。

現在、アジア新興国の10カ国。裕福な国ではやっていない。大体、途上国と言われる国々である。南アジアではインド、ネパール、スリランカ、バングラデシュ、東南アジアでは、ミャンマー、ラオスである。その国々でプロジェクトを展開している。

Very50 活動の背景

Very50 の主な対象者は大学生と20代、30代のビジネスパーソンが非常に多い。彼らが一番問題にしていることはキャリアである。人生の40年から50年くらいは働くので、「働く」=「人生」と思っている。どこでどのように働いていくかが大きなテーマとなる。そこで Very50 は、彼らが仕事を見つけやすく、活躍しやすい仕事ということを念頭に置いている。

なぜアジアかであるが、2010年の世界の富は9000兆円から9500兆円くらいと言われていた。そのお金の約半分がアジアから生まれると言われていた。ビジネスだけではなく、多くのことが展開され、世界がアジアに注目している。

日本人は135万人が世界に出ている。彼らのネットワークは大きくなっている。海外に出て行く日本人は右肩上がりであるが、世界的には大した数字ではない。一昨年の世界を移動した観光客は約11億人で、世界の人口が70億人だから、約7分の1が移動している。母国以外の国に住んでいる人数と、移動している人数を併せると世界の約4分の1にあたる17億から18億人くらいと言われている。今、こういう時代になっている。

アジアの企業という観点で見えていくと、フォーチュン誌の世界のトップ500社の内、日本は62社で、アジア全体では122社である。日本はかつて160社くらいあった。どんどん減っている。日本はGDPに占める研究費の割合はかなり高く、特許の出願件数では現在も世界1位である。日本初の発明も多くある。しかし、問題は、作っても、その技術を盗まれている。例えば、世界のICチップの基板は、もともとはソニーの「スイカ」である。その技術をソニーが守れなかった。作るが、それを守れない、売ることができない。そして世界中の人々とコミュニケーションができない。

世界的なイノベーションを起こしガラパゴス化しないためには、一つは技術革新の発明、もう一つは市場送付や世界的支給、つ

まり、世界中の人たちの癖や動向やニーズを知り、様々な人たちとコミュニケーションをとって、その人達に愛されるような商品やサービスを提供できるような人材にならないといけない。従って、ビジネスの観点で見たときの、日本の喫緊の課題は、何かを作るのではなく、世界中の人たちとコミュニケーションをとり、ニーズを感じ取り、それを売っていけるということである。

以上が背景としてあり、Very50 はアジアに活動の意識を集中している。そして、世界中の人間達とコミュニケーションをとり、世界中の人たちとダイバーシティの中で、彼らに喜んでもらえる、彼らの問題を解決できる製品やサービス、そして、人材を作り出していくことを念頭に置いている。

### 教育の観点から

現在の大学生が自分のキャリアを考え始めるのは大学3年生の終わりくらいである。高校生が大学に進学する時に自分のキャリアをほとんど考えていない。「これをやりたいから大学に行く」という人は僅かで、「自分の偏差値がこれくらいであるから、この大学に行っておこう」という高校生が多いと思う。早い段階で、キャリア、自分が何者か、自分はどうなるのか、自分は一体何をしたいのかを考える機会が圧倒的に失われていることに原因があるのではない。

日本でも一流大学の学生たちが Very50 のプロジェクトに参加をするが、ほとんど偏差値は関係ない。一流大学の学生でも訳の分からないことをやることもある。例えば、あることを多くの人たちに知ってもらい、人気が出るための商品にするにはどうすればよいかを考えるときに、必ず提案されるのは、Facebook だが、Facebook を経営者は知っているはずで、知っているのにやらないことを提案しても仕方が無い。そういう時にやるべきことが2つある。1つ目は相手がどれだけ無知か見極めること。特に大学生などは相手の察知能力が非常に低いように思われる。もう1つは重要なことは世界中の人たちとのコミュニケーションである。

世界で活躍する日本人経営者を見て、多くの方に共通しているのは自分達で考えていく、外国でもどこに行っても生きていけるストリートスマートであった。今の日本を見ると、日本全部1億人で歩みはじめようとなっている。すると、ストリートスマートの価値が軽んじられて、ストリートスマートであるべき素養が学べる機会が少なくなってしまうことを危惧している。

詰め込み式と呼ばれる教育を日本人の多くは、「これでいける」とまだ思っている。しかし、詰め込み式の教育というのはアジアの国々のほとんどの国が行っており、それぞれの国で多くの教育論争が起こっている。ずっと詰め込まれてきた日本の大卒初任給が20万円とすると、日本人と同様にずっと詰め込まれてきた大卒のバングラディッシュ人では能力は変わらないが初任給が2万円か3万円。当然企業の論理からすると、バングラディッシュの方が良いという話になる。これからの日本人を育てていくときに、世界の様々な人材と否が応でも競争していき、勝っていかねばいけない。

### Very50の取り組み

我々のプログラムはアメリカのハワイ大学とクレアモント・マッカーナというビジネスカレッジの認定単位プログラムになっており、その学生と日本の学生と一緒に十勝の地域興しをテーマに行ったプログラムがある。北海道の十勝は餡子が有名だが、それだけでなく、いろいろな野菜がある。この野菜でベジタブル・ティを作り、地域と地域をつなげ、いかに世界化できるのかがテーマであった。通常我々が考えるプロセスは、ベジタブル・ティを世界に出して何をやりたいのか、世界に出してどうなるのかということを探っていくわけである。ところがアメリカの学生たちは、ティなど出しても儲からない。儲けるためには、卸業が入るのであるから、世界最大のカーネギーなどの食料商社に卸せば良いのではないかというわけである。しかしそれでは、卸業が入った瞬間に十勝の名前はなくなる。アメリカの人たちは発想が少し違う、過程にある生産者達の想いなどは飛び越えて、結論に早く行ってしまふ。1ヶ月間十勝に滞在したが、10日間以上は議論し合っていた。需要(顧客数)や売り上げのベース、法律的なこともかなり調べ、最終的には、十勝は小豆が有名なので小豆ティを商品化して、世界に向けて小豆をいかに出していかにかに変わっていった。結果、ホノルルマラソンで配られるお茶、走り終わった後にあんパンが配られるが、そのお茶と餡がすべて十勝になった。北海道の北洋銀行とハワイ銀行が業務提携をすることになったが、ハワイと十勝から生まれていった関係性と彼らの想いが発展していき、ハワイと北海道という地域と地域の関係性につながっていったのである。このような経験をした学生たちは、今でもつながっている。このような取り組みが、世界の人たちとのコミュニケーション、人材作りにつながっていると考えている。

### ◆学校視察◆ 「工学院大学附属中学高等学校」

午後からは、会場を八王子市の工学院大学附属中学高等学校に移し、学校視察を行った。同校の平方邦行校長からの挨拶の後、中学1年生から高校3年生までの5限の授業(中学1年生「数学」・「社会」・「英語」、中学3年生「数学」、高校1年生「地歴公民科」、高校2年生「国語」、高校3年生「理科」と)と中学1年生の放課後の取り組みを視察した。同校の中学校第1学年にはハイブリッドインターナショナルクラス、ハイブリッド特進クラス、ハイブリッド特進理数クラスが設置されているが、放課後の取り組みは、その枠を超え、学びの環境を活かした4クラスを編成して実施している。その目的は「世界に発信できる人」の育成を目指す第一歩とすることである。



授業視察後は、同校の教育内容の説明が行われた後、5限目に授業を行っていただいた先生とその授業を視察した参加者との質疑応答・意見交換会を行い、最後に、当部会の専門委員で、同校の校長の平方邦行先生が視察の総括を行った。

## 視察校代表挨拶

レクチャー型授業は一方の「教える」と「教わる」の関係であり、「教える」側が評価を行う。今、自己否定感を持った若者がどんどん生まれている。フラット化した時代では学校も今までの教える教わる関係を壊していかなければいけない。双方向授業を始めて3年目になる。世界はグローバル資本主義社会の中で活躍できる人材（グローバル人材）を求めている。その基礎を中学高等学校で身に付けさせたい。我々の21世紀型教育は、グローバル人材とは英語ができれば良いという意味ではない。学校の考え方としてはIB型の思考を身に付けながらやっていくことである。これはIB校になるということではない。アクティブ・ラーニングが叫ばれているが、講義形式の対局には対話形式の授業があり、「教える」「教わる」の関係の対局には生徒も教師も学習者だという関係がある。これがないとアクティブ・ラーニングは成立しない。そこで、思考コードと思考力テストを行っている。アクティブ・ラーニングで一番高いハードルはPBLやPILである。そこを我々は目指し、教職員一丸となって取り組んでいる。

## 視察校紹介

グローバル教育とは、グローバルスキルを身に付けさせる教育と言えるが、これを21世紀型教育と位置づけ、諸々の改革を行っている。21世紀型教育として双方向型授業を行い、教師と生徒の一方通行ではない関係の授業を目指している。それ以外に英語の運用力、イノベーションとしてICTの活用力、アクティブ・ラーニングはPIL、PBLに重点を置き議論・討論する力の育成を目指している。英語でのプレゼンテーション等で運用力、英語はCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）のC1レベルを目指している、またiPadを使って、プレゼンテーションを行い、ICT活用力を育成している。

アクティブ・ラーニングについてはPeer Instruction LectureとProject Based Learningの2つの研修を教員全員で2年間実施し、現在3年目である。研修上、基準が必要となり、教員が議論し、TOK（思考）コードというコンセプトを作った（TOKは、思考コード開発した代表3人の教員のイニシャル）。作成の前提として、PIL、PBLの授業では答がないため、生徒の発言に対して教員は何らかの評価をしないとpaperだけでは貢献度が測れない。そのため、イノベーションチームを発足し、意見を出し合い、まとめたものである。簡単に説明すると、横軸と縦軸に分かれ、横軸は知識の深さ等、従来型の難易度のようなイメージ、縦軸はクリティカルシンキングや外に向けてのデザイン等のイメージが基準になっている。1年間かけて作成したが、授業で運用していく中で、進化していくコードとして作成が進行中である。同校のコードは縦軸と横軸で9つに分け、ABCの3レベルに分け、C3が一番難しい位置としている。今後はこのコードを生徒と共有することを考えている。

カリキュラムイノベーションということで、カリキュラムの方の改革も考えている。紹介したPIL、PBLは、授業の改革。そして、思考コードは、評価の基準となり得るものとなっている。抜けているのが試験で、現在はテスト改革に着手している。この授業・試験・評価を三位一体で変えていかないと21世紀型教育は成功しない。今後、思考コード、評価基準を教員・生徒・保護者がきちんと共有をし、テスト改革を行う。方法と評価だけ変えても何も変わらないので、試験問題の質の改革に取り組んでいる。どういふ問題が思考コードのB2なのか、C1なのかを検討して、結果を生徒にフィードバックする。テストの問題でSP表を作成し、思考コードと絡めて活用して「君は今B1の辺りが苦手だね」「A3まではできているね」という形の評価を目指している。

## 視察総括

アクティブ・ラーニングという言葉が、中学校・高等学校で使われ出してからまだ一年半くらいで、大学の方で使っていたものがそのまま降りてきた。私たちはそれよりも前に、双方向の授業の必要性を痛感していた。今回の文部科学省の高大接続システム改革会議の中間報告にも、明治以来の日本の近代教育が支えてきた社会が質的に異なる社会になっていくために、教育改革を行わなければならないとある。2003年から2004年くらいに欧米の学校ではスクール形式の授業がだんだん影を潜めており、アジアではシンガポールあたりが変化してきた。2007年から2008年に、説明会等でも保護者にいろいろ訴えてきたが、その頃はグローバル化という言葉を使うことも非常に少なく、なかなか理解されなかった。一部海外で仕事をしている保護者が理解してくれる時代であった。今はもう全く変わって、学校よりもはるかに保護者の方が進んでいる。

過去の経験とか知識を当てはめていけば解決できた時代は終わった。正解がない社会の中で、10年後、20年後、30年後に社会で活躍していく子ども達を教育しなければいけない。日本の子ども達は自己否定感ばかり持つ、英語はできるが、海外の若者達と対等、同等に会話や議論ができない。当然、学校教育の中で子ども達を変えなければいけない。しかし、小学校、中学校、高等学校の12年間、教師が知っている答えに誘導する授業で訓練を続けてきた子ども達は突然には変わらない。双方向の授業で、誘導されるのではなく、自分の発想を持ち、友達の意見を聞いて自分の考えを修正したり、膨らませたりできる子ども達を育てていかなければならない。知識を否定しているわけではない。知識があつて思考力や判断力や表現力につながるが、知識がなければ表現力が乏しいということはない。積み上げ式だけで行う講義型の授業を続けることは良くないという結論に達しており、どちらが先かということで、今一生懸命進んでいる。まだまだ発展途上で終わりはない。これからもっと質の高いものになっていくように努力をしていく。



## ◆ 専門委員長総括 ◆



### 大羽 克 弘 (グローバル教育研究専門委員長)

閉会式では、大羽専門委員長が視察校へのお礼と挨拶を兼ね、本研修を総括した。

大羽専門委員長は、グローバル化に対する考え方は世代によって違い、いろいろな方の話を聞きながら、生徒を教育していくことが必要であり、またグローバル教育には解答がないため、日々、実践をしながら考えていくことが大切であると総括した。

## ◆ 参加者アンケートより ◆

### 講演 I

- “個性” が重視される時代に、既成の観念にとらわれない活動や取り組みを、目的や内容などについて、具体的に説明いただき、新鮮な体験となった。様々な事例は今後の学校づくりのヒントになった。
- 本校にも建築学科を志望する生徒がいるので非常に有意義な情報が多くあり、役立った。
- ハイブリッド留学の考え方は興味深い。我々は留学という言葉から最大の効率を得ようとする。その結果、費用や生徒の負担が高くなりすぎてしまい、参加のハードルが高くなってしまう。授業を日本人が行うことで費用や負担を下げ、より多くの学生の参加を促すのは面白い方法だと思った。
- 特にハイブリッド留学、ダイバーシティについて興味を持った。留学への経済的、精神的な障害を取り除いていくプランニングが恐らく大変な作業で周囲の反対も大きかったのではないかと推測したが、軌道にのっているということで、私たちもまずはそれらの先入観を取り払わなければいけないということを痛感した。
- これからの国際化は個人と個人の関係の確立から始まるということが分かった。我々はそれを確立するために、どのようなプログラムを用意するかが大切である。
- 教科外活動としての科学教育センターの科学教室を開くことは広く社会の貢献につながり、子供達を育成する上で大切な行為である。また、医薬工の連携や災害研究など、どれも1つの大学という枠を飛び出して、社会につながる素晴らしい活動を感じた。グローバル人材とは英語ができる人ではなく、どこでも成長できる人というのは共感した。技術を持った人材を育成しているからこそ、英語ができることによって、世界で活躍できるという自信がある工学院大学がハイブリッド留学をする意義がわかった。
- 工学院大学の紹介での取り組み事例は非常に参考になるものがあつた。本学校法人にも大学があるので、大学にも紹介、検討ができると思う。
- ハイブリッド留学の試みが、語学力の壁、経済力（費用）の壁を乗り越えてのものであることだけでなく、工学院大学独自の学生の専門性を生かしてのものであることに興味を持った。女子校や宗教教育を本校の特徴ととらえて、独自のあり方を模索したい。
- 個人と個人の関係から国際化が始まり、個人と個人の間にある「国境」をなくすために必要なことを教育で学んでいかなければならないという言葉が自分の中で響いた。英語はその「国境」をなくすための1つのツールであって、そのツールは様々にあると気づかされた。
- グローバル教育の目標は「個人の内面の国境をなくすこと」に感銘を受けた。グローバル教育の奥深さを考えさせられた。
- 工学院大学の、現代のグローバル社会の中での使命などがよくわかる講演だった。実学を伴うもので、中高の現場にそのままスライドはできないが、留学における考え方等、大変参考になる内容だった。

### 講演 II

- 菅谷氏の特異な経歴の新鮮な視点に触れることができ、大変興味深かった。これから日本の教育に求められるもの、役割を見直す必要性を強く感じる事ができた。より広く事業を展開し、教育現場におけるキャリア教育にも協力してもらいたい。
- 教育現場に社会が入り、生徒がそれに触れることの意義を感じられたことが、財産となりそうである。また、日本の課題は作るのではなく、コミュニケーションをとって、売っていくことであるということは、生徒を育てていく上で良いヒントになった。
- 企業としての現状とそこへ至るための教育がどのように橋渡しをしていくかを学校現場でも考えていくことが必要だと強く感じた。“相手を慮る Communication” が今後必要で、ただの英会話じみたものが重要とされている現状の打破が課題だと感じた。
- 人材育成と教育の目指すことは同じと思うが、社会人、大学生の人材育成と私たち中高の教員が行っている人材育成では手法も観点も大変に相違があり、この点が日本のグローバル人材の育成が進んでいるとは言い難い状況を作っていると感じた。実社会で活躍することへの意識を教員が持つためには、教員自身が実社会での経験を積むべきと考えた。
- 知識のインフレ化が始まり、発展途上国の優秀な人材にこのままでは負けてしまうことの認識が理解できた。いかにコミュニケーション、そして、その地域にあった多様なサービスができるようになることでしか生き残れない時代がくるのが理解できた。
- 今の生徒達に足りないと感じていたことをストレートに言っていただき、同感である。この話を学校の場にかえて、実践できることもあると思った。

- 「考える力」「コミュニケーション能力」の重要性が今後さらに高まることが理解できた。将来を見据えた求められる教育という観点は全教員で共有したいと思う。
- 興味深い考えと教育プログラムについて伺うことができた。高校生、中学生がどのように社会に対する問題意識を持ち、自ら将来像を模索していくのかについても考えを拝聴する機会があればと思っている。
- 多くの指針が示された中で、直ちに組み立てる事項と、今後の課題として取り組んでいく事項があるが、前者についてはPTAへの父親の参加が、教育が社会と関わることにつながることにヒントを得た。中高の教育現場にどう還元するか、導入するかであるが、「世界的イノベーション」や「世界的学歴インフレ」の課題など、意識の改革を生徒及び職員に広めることが重要と感じた。
- これから先進国の人たちに求められることについて考えさせられた。世界の人たちとのコミュニケーション、市場を見極める目、発想力など、詰め込み式教育だけでは育めないモノをどう身に付けるか、学校の教育は変わっていく必要があると思った。「詰め込み式教育は他の世界でもやっている→人件費の安い、同じ能力の人を企業は選ぶ」という流れは説得力があった。「子どもたちが生き残っていくために何が教育に必要なのか」日々考えなければならない。
- あらためて、なぜ日本人は「グローバル化が必要か」を理解することができた。中高の段階でキャリアを考えることはとても大切であり、グローバルな観点から、経験する機会を是非設けていただきたい。本校も「変わらねばならない」と強く思った。
- 教育界の人ではない経験、発想の自由さが素晴らしく、こういう方に依頼した着眼点も良いと思った。できれば、現場の高校教育でどのようなことをしていけばよいのか、というところまで踏み込んだ見解がほしかった。
- 学校という教育現場にいて、社会の情勢が見えにくくなり、今まで受けてきた知識を教える形式の教育に慣れて、それに安心してしまっている自分に気づく講演だった。偏差値があまり高くない学校に勤めているが、積極性や知識以外の才能に秀でている生徒が多く、受験のためだけでなく、将来使える能力や考え方を身に付けさせたいと学校全体で考えているので、少しずつ社会活動と深くリンクした活動を取り入れたいと思った。
- 「なぜ、今、グローバル化か？」その背景がよくわかった。志を高く持つ若者を、学校でどうしたら育てていけるのか、問題提起していただいた。
- 学校教育に社会を取り入れるということ、グローバル社会での学歴インフレに対する教育の必要性を感じた。
- 今、世の中が向かっている、グローバル化の真の意味を感じたように思う。教育の中では、まだまだ、グローバル＝英語が話せる、海外経験がある、といったレベルだが、これからの日本を我々もしっかり見ていかなければならないと思う。しかし、教員のグローバル化が一番、難しいと感じている。

#### 授業視察・施設見学

- 生徒の積極的な姿勢が印象に残った。発表のための準備や動機付けにも工夫がなされていて、将来、生徒が実践力を身に付けている姿が目につく。
- 英語の授業を見学したが、生徒達のiPadの扱いに驚いた。非常に効果的に使用できていたように思う。iPadを使った授業と本を使った授業の割合を知りたい。
- 生徒と先生（日本人）の英語力の高さに驚いた。
- 公民の授業を見学し、授業中にフィードバックがあり、よかったと思う。
- 注意力・集中力が欠けている生徒がいても、おおらかに受け止める先生方の寛容さが生徒の挑戦する心、つたなくても自分の言葉を使おうとする姿勢につながっていると感じた。
- 一方的に教える授業だけでは、生徒の習熟に対する把握がわからなかったが、生徒同士の討論を行うことで、生徒同士で習熟度が高まっていく過程が見ることができたように思えた。
- 現在、文部科学省から言われている、グローバル教育、アクティブ・ラーニングをすでに実践されていることを見学でき参考になった。これを全校あげて実践するには時間も苦労も多く、必要なことも感じた。全教員が同じ方向に向かうために研修の必要性も痛感した。
- 現代文Aの授業を見学。同じ国語科として、教材的にはなかなか内容的に到る部分までは生徒に受け入れにくい教材であるが、本授業では時代背景をはじめ、現代との相違、そして何より発表者への問い掛けに感心させられた。
- 間違ってもいいから「発信するスキル・技術」を育む教育姿勢が見られた。knowledgeも大事だが、それを運用する力を使って考える力が育まれていると感じた。
- 飾らない、自然体な様子を伺えたことがとてもよかった。現代文は生徒に考えさせる授業をさせていることがよく行われていた。中1クラスはとにかく先生の導き方が素晴らしかった。
- 生徒達が積極的に英語を話そうとする姿勢がとても印象的だった。方法によってあれだけ英語が話せるのだと思い、是非本校でもと思うが、壁が厚そうである。

#### 学校関係者との協議

- 先生方が公開授業をすることで、緊張しつつ、練習、スキルアップになるとの話が印象的だった。
- 実践上の工夫や苦労などオープンな話しができ、大変参考になった。今後さらに改善、発展したものの公開を期待している。

- 学校の目指す方向性が、教員個人の価値観、生徒の適正や個性に合致して、大きな効果を生み出すのだと感じた。
- 「AI」の考え方などについて詳しく説明が聞け、勉強になった。双方向授業等の新たな指導が少し見えた気がする。
- 先生方も、この新しい教育を自分の授業で実際に行うために試行錯誤しているとのこと、今まだ改良していかなければということであった。一人ひとりの教員の努力が感じられた。
- 英語の授業を見学したが、チームティーチングの授業で、上手く日本人の先生と連携されていた。外国人の先生とも話ができて、とても良い経験となった。
- 学校をあげて研修・改革をしようというエネルギーが感じられ、本校でもそのようにしていかなければいけないと思った。
- 評価の検討をされているということで、非常に進んでおられることに大いに刺激をいただいた。苦労や授業の工夫等も聞くことができ、今後活かしたいと思う。
- 学校全体として、一方向に向かっているというチームワークが感じられた。ICTだけでなく、上手に授業が組まれていて、いかに生徒にとって有効かが、良く考えられている。

◆ 都道府県別参加者数加者 ◆

北海道	2	東京	9	大阪	3
宮城	2	富山	2	奈良	1
山形	1	山梨	1	広島	3
茨城	1	岐阜	1	福岡	1
群馬	2	愛知	1	熊本	1
埼玉	2	三重	1		
神奈川	10	京都	2	合計 19都道府県・46名	